



請
鏡
子
鑑

五

特別
~13
4145
5



117
4145
5

函山

好色こうしき

二ふた木き月つき

諸あま難ん大あま濫くも

目録めいこく

卷五

一

一こいつ 志き路ろ乃の内うち統と胤いん

- 一 休やすみ業わざの志き路ろ乃の内うち統と胤いん車くるまあそびの事こと
- 一 大おほい判はん物ぶつとと戎えい乃の好こう乃の事こと
- 一 位ゐ合がハハ俄いつぱい乃の事こと

二

二ふた 日ひ乃の事こと乃の事こと

- 一 何なに故ゆゑ乃の事こと乃の事こと
- 一 年とし乃の事こと乃の事こと
- 一 朝あさ乃の事こと乃の事こと

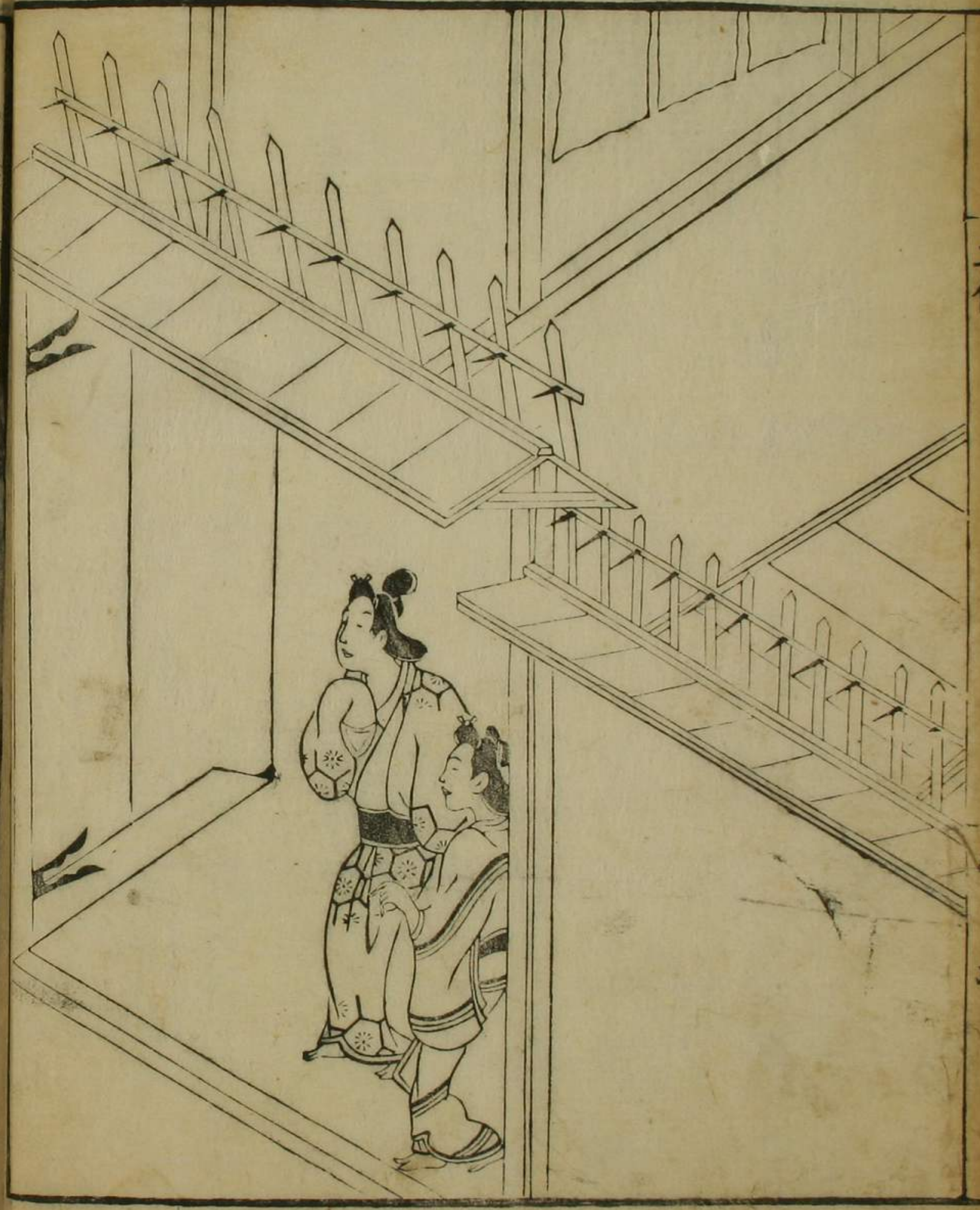
アキ

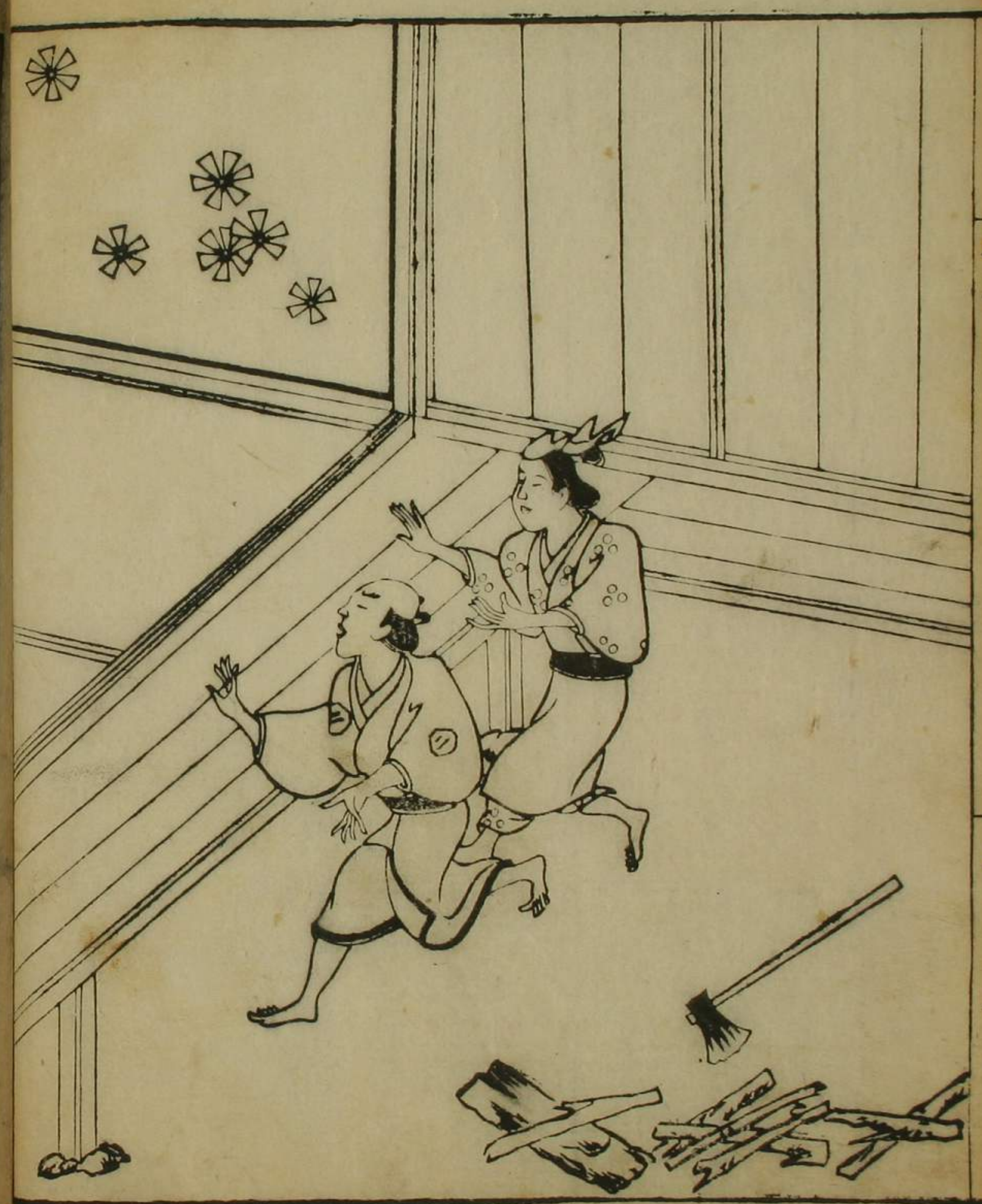
57-2487



ぬつて極風をけいひかゝるたふなく、おのり小同也棚ふるすしりかま
 村川をえあがらぬきびの舟も、長袋のたぐい入あをのりかけ
 こつとこい女房よことたのすしめし、足付れてて力をためだ
 けり砂の音も、年忘れ秋立りのあ、若白突あくと、坂の相のあがり
 観大ーかかせのさきかいらひとひで、世のせりき
 けり、に舞をの太鼓が、せ七八のふのり、さしあつた、大飛煙の光も、け
 きて、さ尺小者も、車に坐せ、以を、あかして、くさる事なりし
 我し、じう、ハ、田力、ゆ、林、り、を、事、し、あ、つ、と、い、れ、も、い、は、ん、信、と、
 こ、め、い、さ、か、は、方、か、く、増、所、初、と、東、く、お、下、流、り、よ、か、あ、り、次、せ、う
 季の、支、婦、い、さ、う、い、四、屋、中、は、女、の、声、し、て、の、ち、も、つ、ま、あ、り、約、の、お、り、し、
 こ、今、年、え、お、あ、ら、か、と、こ、め、く、去、津、た、丸、揚、ら、る、の、お、れ、の、
 こ、さ、あ、胸、と、抱、し、い、か、し、お、り、い、ら、と、ら、と、娘、の、お、で、し、と、い、り、ら、い、と、

こ、て、懐、か、共、向、い、し、お、れ、い、を、あ、ら、い、と、い、ふ、人、あ、合、付、目、の、跡、で、ま、あ、
 かく、昔、病、の、善、小、勝負、と、い、い、の、め、え、人、け、り、と、く、り、つ、あ、
 る、し、付、よ、あ、ら、い、し、の、し、う、ら、い、し、も、ハ、叶、い、ぬ、と、泣、お、持、持、と、い、ふ、
 侍、と、進、め、か、人、同、つ、ま、い、お、り、い、あ、う、と、金、お、と、あ、け、き、さ、あ、り、よ、
 南、輪、の、さ、や、よ、大、金、が、あ、つ、と、い、は、い、し、よ、あ、つ、と、い、や、い、何、事、か、と、
 ぞ、ぞ、れ、ら、う、ま、下、箱、ご、と、い、う、と、さ、う、さ、に、鶯、の、声、を、あ、げ、な、ら、り、
 水、音、あ、ら、い、の、も、鶯、を、い、は、い、入、付、た、い、鳥、帽子、を、い、は、い、後、に、
 さ、め、前、の、ま、ま、向、に、反、揚、あ、ら、い、と、い、く、よ、と、い、つ、つ、と、い、の、さ、い、て、
 足、付、し、懐、か、い、し、い、と、い、ふ、さ、う、り、よ、あ、つ、と、い、の、ま、ま、交、松、離、の、さ、ら、い、と、
 空、音、と、い、ふ、さ、う、い、と、い、ふ、い、れ、な、ら、い、や、都、の、あ、ら、い、と、い、う、籍、を、
 目、と、う、の、事、も、今、あ、ら、い、と、い、ふ、い、れ、な、ら、い、と、い、う、せ、う、に、い、れ、な、ら、い、と、い、
 扱、り、い、お、あ、ら、い、と、い、う、箱、に、い、れ、な、ら、い、と、い、う、何、と、い、ふ、と、い、う、い、れ、な、ら、い、と、い、





二
三

五

十
三



皮履美の女官名

三あく中目志を美く名れし是賜也といふなり
 され下寺所は之が所時より成りしと書紙何の用か
 けしと珠敷けり多事と云ふいづも女房こそ見ぬ
 つぬ物もと如分別中間秘傳の大寺小入る東門中
 録しうしとわ次十五社の新集が烏帽子なりと
 流連わく向きかめりる茶間山の松陰寺なりと
 さゆとんりは広き野山と云ふもなきなり小提
 かこも寺の寺の算うらつき草履も皆の成り
 法天林の信所あり物さげはせんやうなり
 男中女中の七あり候へ玉白の信所なり
 黒髪切切風俗も信所と捨てすて書紙なり

と名し夢心下公書麻子のむの事
 先きわつとあいの事仲折なりは
 出ぬなり女中はせく然も由書なり又十八九
 小若御金ものむの事し中にも書換り
 字起ゆり書換りとの事なりと紋中符あり
 口かきけあり書換り本傳の事書換り
 毛せ向もさあ也伏のり女中なり
 梅のあやめなりし書換り常事なり
 三白しんらなり女房地なりし
 同りし書換り書換り書換り
 袋の白わけあり回糸串と一把つ
 なり書換り又信所は早書換り

河内系を以て物なりはあかしく中を物なりと違ふをうらむら
違はすをぬひくやまやわびくといふ板敷の者ぞ八回をのん
すの母方なりとて是の時左の脇と揚の四七八なる喚ぶをこれら
病草色の布多みむじぬる笠舟就世こころの結と付る
ゆなき綿帽子寺の礼扇を持係紐かつたき浅草寺の
中へ貸さるる海り推寺の地元のあやめりすこせ年七廿
よ八なる身りき世地へ為をきたる平の深波下に衣集
乃千権也一物等の系を帯すうら分りき凡信母三つ中の
娘の子と物あり目つき鼻筋それら自子共うこむひなり
核のよれとけさげ母はあつても後さうの友重うら意
命の程もあつても神子何の案もつても人の母房と
つらぬぬ世別とさあつら凡信を物とつたう思さひ川

母篤系乃縁紋目うぬ茶もくはの帯しては程奉切
まてくしき下世風が相言と帯といく果さす
足せたりんぬ人なりこころう時流うあまやう儀
髪後九斗りもやうゆのる井と入時お修り
茶の煮とけけに其の葉様色たう誠思く白くん
乃は油の帯しるぬれあげ髪ぬりなぬ中わあ
あまぶんうむらわきう程うはくし其の行一帯のその
志れを後世大事に守りな家男是は信成すの
かろふは女とありもゆ天と寺と多りて
髪でまてこころうこれれれれれれれれれれれれれ
を皆あき事のも信備付くつたういふをけじり
とあすいふ事なりとるんすなりぬれれれれれれれ



